

第3回奈良県・市町村サミット

【荒井知事】 お忙しい方々にお集まりいただきましてありがとうございます。奈良県市町村サミットの開催でございますが、もう過去2年間このような形、協議会の名前は変わってまいりましたが、勉強会をしてまいりました。それとともに、世の中の動きもいろんな面で変わってきたように思います。今日の日経新聞の1面のトップに、「自治体間で統合可能に」という記事が出ておりました。これは、来年度にも地方自治法を改正して、複数の自治体による機関の共同設置を大幅に認める、会計などの事務部門を統合すれば、職員を減らせるほか、観光や産業振興などを共同化すると、広域での政策に取り組める効果が期待できる。市町村合併をせずに地方行政の効率を高めるねらいだという記事が出ておりました。

皆さんと勉強会をしてまいりましたのも、奈良県は全国に比べて市町村合併の率は低いわけでございます。私が知事になりましたときは、もう市町村合併の機運が減じるというか、去りつつある中でのこれからの市町村の行財政の効率化というのをどうすればいいかという中で、1つの方法として、市町村間の連携、広域連携を模索するため、県の支援できるやり方を模索してきたわけでございます。

それを追うかのように、総務省で地方自治法を改正するという記事が出ております。同じ記事の中でございますが、首相の諮問機関である地方制度調査会は、6月中にも市町村の合併を推進する平成の大合併の終結を宣言する方向。これからは、自治体同士の連携によって、地域の活性化や合理的な行政サービスを目指す第2段階に入るといようなことが記事になっております。まだ日経新聞の記事だけでございますので、このような方向が固まったかどうかはわかりませんが、このようなこともあろうかと思っ、奈良県においては、効率化を目指した合併以外の行財政の効率化の勉強をしてきたわけでございます。

この協議会はそのような場であったわけでございますが、今後、奈良で具体的にどのような分野での連携、広域連携というようなものが可能かどうか、もう少し事務的に検討する必要があるかと思っます。もう少し進めた連携のあり方を具体的に検討して、この地方自治法の改正が、後追いでも、法的に仕組みを確立していただければ結構なことだと思っますし、どういう具体的な連携が可能かということは、法の施行を待って各地方が勉強するのではなく、奈良のように、勉強していると法律ができた。そのときの奈良のモデル

のようなものをこの勉強会からつくれたらありがたいと思っております。

本日は、早稲田大学から友成真一先生にお越し願ひまして、「大学と連携した地域づくり」という題でご進講をいただくことになっております。奈良県と早稲田大学は包括連携協定をいたしました。奈良は、大きな総合大学がないこともありまして、高校を出ると、人材流出県になって、過疎地域だけではなくて、奈良県全体が人材流出県になっているわけでございます。今後、遠くへ奈良県民のご子息が行ってしまい切りにならないように、近くで就職をして、地域のために働いていただけるような県になるようにというのは、大学が1つの大きなセンターになる可能性がございますので、どのような話をしていただけるか、よく伺わせていただきたいと思います。

改めまして、本日のご参集を感謝、歓迎申し上げたいと思います。本日はありがとうございます。今後ともよろしく願ひいたします。（拍手）

【司会】 知事、ありがとうございました。

それでは、本日の第3回のサミットでございますが、知事からもお話がございましたとおり、「大学と連携した地域づくり」というテーマで、早稲田大学社会連携研究所長の友成真一先生にご講演をいただきます。

友成先生の略歴につきましては、レジユメにもありますが、概要を申し上げますと、1980年に通商産業省、現在の経済産業省に入省され、その後、ロシア東欧室長、中国通産局公益事業部長、国土交通省企画官等を歴任されまして、2002年から現職でおられます。

それでは、友成先生、よろしく願ひをいたします。

【友成教授】 いいですか。始まりましたか。パワーポイントの操作に集中しております。使いなれない新しい兵器を導入したものですから。きょう、ちゃんといくかどうかよくわからないですけど。いつも、パワーポイントの切りかえというのはテレパシーでやっているんです。あそこにパソコンを置いてうんと念じるんですよね、「切りかわれ」と言うのと、「切りかわってほしい」と言うのと、実は、知ってる人がぱっと行って、さっと切りかえてくれるという、念力操作というのをいつもやっていたんですが、きょうは、ちゃんと新しい秘密兵器を導入いたしまして、これで遠方から切りかえられるというすばらしいことになっておりまして。

友成でございます。先ほどの過疎法の総決起集会から比べると……。ああ、おめでとうございました。何かとってつけたようにおめでとうございましたと言っておりますが、総

決起集会から比べますと、かなりフェーズの違った話をさせていただくことになろうかと思しますので、皆さんもちょっと頭を切りかえていただけると非常にありがたく思っております。途中、あほらしいことをどんどんしゃべりますので、笑いたいときには、ちゃんと笑っていただくと非常に私もやりやすいのでありまして。

実は、久しぶりに奈良にやってまいりました。京都で学生をやっていたんですが、おそらくあのころ以来かなと。申しわけありません、その間、あんまり奈良にご縁がなくて。そのころは何度か奈良に通っていました。別に興福寺の阿修羅像を見に行くために来ていたわけではなくて、ほとんど奈良女子大をめぐってずっとやってきておりまして。

きょうも家を出るときに、うちの家内が、「あなた、奈良に何しに行くの？」と言うから「いや、ちょっとしゃべれって言われているので、しゃべってくる」と言ったら、「あなたの話なんか、だれも聞いてくれないんだから、どうせ大仏に向かってお話でもしてくるんでしょ」みたいなことでありまして。「いや、実はそうなんです」と言っちゃいました。

あまり笑いとれなかったですね、今のはね。かなり考え込んでやってきたんですけどね。お笑い芸人と同じでありまして、売れないお笑い芸人って、最初、皆さんの笑いをとるのに非常に苦労しますよね、それと同じでありまして。この空間は、もうどんどん笑っていただいて結構ですので。やじ、結構です。きょうも議会の方がいらっしゃると思っていますので、やじ飛ばすの、非常にうまい方もいらっしゃると思っていますので、どんどんやじ飛ばしていただいて。

実は、きょう、どんな方がお集まりになっているかというのがよくわからずに、ちょっと報道的には不都合なことを言うかもしれませんので、そのときは、しっかりカットしておいてくださいね。よろしく願いますね。そうじゃないと、なかなかしゃべりづらいわけで。そうはいっても、大した話はしません。おそらく、先ほど知事にご紹介いただいた、何か新しいモデルづくりを考えるのに当たってみたいなお話がありましたけれども、そんなことは一切ありませんから。期待していただかないほうがいいかなみたいな。絶対期待してはいけません。多分、皆さんの人生の中で一番むだな1時間半を過ごすんじゃないかと私は思っているんです。「こんなもん、来るんじゃないかった」みたいな。「聞く必要なかったな」。

この時間は、別に私の時間ではありません、はっきり言いまして。皆さん、お一人お一人の時間ですから、寝たい方はぐっすり寝てください。よろしく願います。もう、出たい方はどんどん出ていただいて。携帯電話、されたい方はどんどんしていただいて。そ

んなことでいきたいと思います。

いつも私は、授業があるときに、クラスの後ろ半分の人たちに向かって話をしておりますので、多分、私のきょうのメンターゲットはこの辺の方なんですよね。なぜなら、大体後ろに座る学生というのは、寝ようと思ってやってきているわけですよね。単位さえ、出席さえとれりゃいいみたいな感じでね。だから、そういう人たちに向かって私はいつも話しかけるんです。きょうは、どういう感じかというのは、ちょっとわからないので、済みません、きょう、首長の方はどの辺にいらっしゃいますでしょうか。首長の方、ちょっと手を挙げていただけると。ああ、ありがとうございます。いや、たくさんいらっしゃっていただいて、ありがとうございます。議会関係の方って、いらっしゃいますか。ああ、たくさんいらっしゃいますね。どうもありがとうございます。市役所だとか、役人関係の方、いらっしゃいますか。ああ、どうもありがとうございます。学生の方、いらっしゃいますか。学生の方は、きょうはいらっしゃらないですね。一般市民の方、いらっしゃいますか。ああ、そうですか。どうもありがとうございます。いつもこうやって、皆さんに手を挙げていただくことになっておりまして。これできょう判明したんですけれど、奈良県には市民がないというのがよくわかったんですよ。こういう場合は、やはり皆さん手を挙げていただかなきゃいかんわけです。皆さんは、市民の1人1人なわけですから、実はね。いや、実は自分は首長だ、議長だとか、議員だとか何かこう思っているんですけども、自分が市民であるということを結構忘れちゃったりしてしまして。

はい、どうぞ。

【参加者】 すみません、村民です。

【友成教授】 あ、村民ですか。申しわけありません。村民の方、手を挙げていただけますか。ああ、ありがとうございます。じゃ、町民の方、いらっしゃいますか。はい。じゃ、市民の方、よろしく願いいたしますね。ああ、これで大体いきましたね。ありがとうございました。ちょっと配慮が欠けておりまして、申しわけありません。あ、府民の方、いらっしゃいますか。県民の方。ああ、そうか、奈良府民なんか言っちゃ、いけないですね。そうですか、なるほどね。申しわけありません。

きょうのお題は、なぜ地域は大学と連携するのかみたいな話をしようと思っております。哲学編と書いておりますので、あまり具体的な話をしようと思っております。なぜなら、きょうご準備したパワーポイントをまともに話すと3時間以上かかります。それを1時間弱で話をしようという非常に無謀なことを考えておりまして。そうすると、どうしても具

体的な話……。具体的な話って、どちらかという私の自慢話みたいなことになりますので、あまり自慢話をしても仕方ないかなみたいな話でありまして。ですから、どちらかという、非常に理念的な話をします。理念的な話ですから、ちょっと眠たくなるかもしれません。なおかつ、この理念が受け入れられないという方は、必ず国民の中の何十%くらいはしゃるはずですね。その方は、そっと耳を閉じていただければ、それで結構かなというのを思っております。

さてさて、ちょっとパワーポイントを切りかえてみましょうかね。これぐらいの距離で切りかわるか。ああ、切りかわりましたね。ありがとうございます。ああ、ここの前のパワーポイントを別に見ていただく必要はありません。皆さん、手元に全部配っております、1枚だけちょっと違いますけれども。

実は、事務局の方に「A4、1枚に4枚入るので、印刷して配ってね」とお願いしたのですが、非常に配慮がありまして、いや、何かご高齢の方は字が見えないかもしれないということで、ぜいたくなことにも、1枚に1ページ印刷しているという、やはり奈良は豊かだなみたいな話でありましてね。

きょうはまちづくりの話をするんですが、まちづくりの3人という話がありまして、「若者」、「ばか者」、「よそ者」なんです。「若者」と「よそ者」と「ばか者」が必要なんです、まちづくりには。「若者」の分かれ道、これが多分4枚入りのパワーポイントが読めるかどうか。ああ、済みません、これもちょっと笑いがとれなかったですね、残念。冗談です、それは。全くの冗談でありまして。

つぶやく人の略歴をこういうふうに書いています。関西に7年間いました。この辺で遊んでいましたね。もともとは通産省という役所に入りまして、官僚をやっていました。こういう人をどう言うかって、ご存じですよ。昔官僚をやって、今官僚をやってなくて、どこかに行っちゃった人。過去官僚形と言うんですよ。もう、知事なんて大先駆者なんですけどね。過去官僚形の親玉みたいな。きょう、現在官僚形の方も来られてましたね、過疎法の決起集会のときね。学生とつき合っていると、これから官僚になろうという人がいますので、未来官僚形と言うんですけどね。どっちにしろ、官僚という世界は、この世界の中で、もう終わっているんじゃないかと思っております。過去に完了して、終わってしまった形ということで、完了形と。ああ、これ、私の話ですので、知事の話じゃありません、私自身の話ですから、間違わないでくださいね。

まあいろんなことをやっておりました。イラクだとかニューヨークとかロシア東欧とか、

中国とか、こういうことを担当していたんですが、あの中国は、広島のことですから、絶対間違わないでください。これで大体わかるんですね。広島ですから。いいですね。チャイナじゃないですよ。だから、質疑応答のときに、中国が金融危機以後どうなったかって、ややこしい話、聞かないでくださいね。広島のことだったら、聞いていただいて結構ですけども。いいですか。はいはい。ああ、ありがとうございます。

下に信条というのがありますね。信条、これは別に覚えていただく必要はありません。学生には覚えろと言ってますけど。「試験に出るぞ」と言ってるんです。特に試験はやらないんですけども。「真実は現場に生息する」。なぜこんなことを言ってるかということ、これは知事がよく言ってらっしゃる、霞ヶ関で33年間生活されていて、既成概念と慢性疲労というところの中で戦ってこられたということと全く同じでありまして。私も、霞ヶ関において、あんまり真実の世界があるように思えなかったんですね。事件は会議室で起こっているんじゃないという話です、現場で起こっているんだと。会議室がある霞ヶ関だとか永田町が、これが日本の真実を反映しているかということ、どうもそうじゃないような気がしているんです。ですから現場におりてきたということでありまして、真実は現場に生息する。それで、一点突破だ、家族第一だという。この「真」の字と「一」の字と家族の「家」という字をつなげると、「真一の家」となっているんです。ああ、ありがとうございます。もう気がついていただいた方は黙っておいてください。気がつかない方は、それなりにということで。これで大体試験は大丈夫ということでありまして。そういう遊びをしています。

2008年の10月に、とある賞をいただきました。皆さんのお手元にはありませんが。今飛ばそうとしているんですけどね。飛ばないです。ああ、飛んだ。とある賞をいただきました。大体賞味期限1年ですから、早いうちに紹介しておこうと思います。経済産業大臣賞というのをいただきました。これ、一般的に、国民レベルからいうと、昔経済産業省の役人をやってたやつが、経済産業大臣賞をもらったんですよ。これ、出来レースでしょう。これはいかんでしょう。でも、ほとんど話題にならなかったですね。いかに私が元役人であったということをみんなから無視されているかということですね。多分、経済産業省の私の同僚たちも、私が元役人をやっていたということを何かもう無視しちゃっているんじゃないかと思えますけどね。

右のほうで、私に賞状を渡しているのは、東北の経済産業局長というとある偉い方なんです。たまたまた仙台でやっていますから。彼は、私の1年下の後輩なんですよ。1年下

の後輩から元の親分の賞状をもらうという、この心境、なかなか微妙なものがありまして。単に遊んだ成果でもらったという。

本日のメニューですが、私がつぶやいて、皆さんからちょっとご質問をいただいたりしながらつぶやき返すと。Y o u M E シートの回収というのをやっております、皆さんのお手元に、何を隠そう、Y o u M E シートというものが多分あると思うんですね。ご確認ください。このY o u M E シートというのに、だれだれより友成へという、私に対するメッセージを書いてくださいというであります。きょうのお題は、「私はこのように大学を使い倒したいのです」という。これ、別にこのお題じゃなくても構いません。きょうの感想でも何でもいいですから、とにかく1行でもいいです、1字でもいいです、絵でも構いません、何か書いていただいて、それで、お帰りのときに提出していただくとありがたいということです。これを出さないと、あそこのドアから出れません。いいですね。学生を対象にしていると、これが出欠がわりになるということでした。人間、何か書こうと思うと、ちょっと眠気がうせるということです。何でもいいですから、何か書いてください。

「友成から返信を希望される方はメアドをご記入ください」と書いていますので、メアドを書いていただいても結構です。ただし、私から返信があるということを絶対期待しないでください。大体、人間、期待すると不幸になりますからね。人に期待すると不幸になりますよね。大体そうですよね。長い間人生を歩まれてきた皆さん、人に期待して裏切られたことってありますよね、多分ね。ないですか。ありますよね。ですから、人に期待しないでください。でも、返信を期待される方はメアドを書いていただければいいかなと、こういうふうに思っております。

さて、どんどんいきましょう。ちょっと哲学的な領域に入っていきます。どうも日本の資源が使われていないんじゃないかと、ずっと前から考えているんです。どうしても過去官僚ですから、官僚だった時代に何を考えているのかというと、日本がどうも元気ないと、日本をどうやって元気にすればいいんだろうみたいなことをずっと考えていたんです。日本の資源が使われてないんじゃないかということなんですね。産学官連携とか言われます。でも、産学官連携も、基本的には成功しているところはどこもありません。日本中で、産学官連携が成功しているところがあったら、ちょっとここ、来てくれるという話で、教えてもらいたいんです。残念ながら、成功とはほど遠いことになっております。

「企業の資源」というのがありますね、これは結構利用されてきました。だから日本が高度成長を勝ち取ってきたというのがあったんだと思うんですね。ところが、使われていな

い日本の資源、ワン・ツー・スリーというのがあるんですね。ワン・ツー・スリーというやつです。これに反応される方はいらっしゃらないですね。「ワン・ツー・スリー」の番組は、こちらで放送されていませんか。食いついていただけると、非常にありがたいんですけどね、次から次に話がしやすいんです。

3位。これ、「地域の資源」ですね。「地域に資源」が眠りまくっているんですけど、ほとんど使われてないです。「地域の資源」といっても、いろんな資源があるんですが、とりあえず「地域の資源」ということにしておきましょう。「地域の資源」って、使われていないです。

2番目に使われていない資源。これ、大学なんです。「大学の資源」、使われていませんね。「大学の資源」の最たるものは何かというと、これは、私は圧倒的に学生だと思います。圧倒的に学生です。早稲田大学に5万7,000人の学生がいるんです。5万7,000人ですよ、すごいですよね。全国に学生、どれぐらいいますか。350万人ぐらいいますか。ちょっとわかりませんが。すごい数の学生が親に授業料を払ってもらってみたい、皆さんですけども、払っていらっしゃるのね。払ってもらって、基本的には遊んじやったりするんですよ。この学生は、社会に出た後に、まあ立派な会社に入ったりしながら社会で活躍するんですよ。じゃ、何で学生時代に活躍しちやいかんのですか。これはおかしいですね。学生時代に社会で活躍すればいいんですよ。そもそも、社会に出るなんていう言葉がおかしいでしょう。学生は社会人ですよ。学生が社会人でないと言ってること自体が、大学が象牙の塔の中に入って、学生がモラトリアムの期間を満喫していると言ってるに等しいわけです。そうじゃないです。学生も社会人なんです。じゃ、学生がちゃんと使われりゃいいじゃないかという話なんです。

それで、1位。これはもう皆さんがご想像のとおり、「行政の資源」ですね。「行政の資源」が使われていないですね。これはもったいなくて仕方ないんです。なぜ使われないのか、よくわかるんです。私もいろんな自治体にお邪魔いたします。そうすると、特に市町村役場と言うんですか、行きますと、すばらしい職員の方、たくさんいらっしゃるんですよ。やる気があって、発想力も豊かで。でも、その職員の方が動けないんです。その力を地域に開放したらものすごいことになるにもかかわらず、その人たちが動けない状態になっています。これはもったいないです。すごくもったいないです。だから、多分、日本の中で一番使われない資源が「行政の資源」じゃないかと思うわけです。

どんどんいきましょう。地域と大学の包括協定という話が、さっき知事のほうからご紹介

介ありました。早稲田大学では、奈良県と包括協定を結びました。そもそも包括協定という1つのやり方なんですけれども、早稲田大学が墨田区と2002年12月に結んだんですよ。墨田区ですよ。早稲田大学は、墨田区にはありません。新宿区なんですけれどもね。突然早稲田が墨田区と包括協定を結んだんですよ。これ、だれも知らなかったです。実は、今の白井総長と結託いたしまして、私がちょっと何か裏でいろいろと工作をしております、新宿区役所、怒りましたね。何で地元の新宿区を差しおいて、墨田区と協定を結ぶんですかと。これ、新聞がば一っと取り上げたものですから。その後、早稲田大学もいろんなところと協定を結びました。

今全国で大学と地域が結んでいる協定、数多くあります。早稲田だけじゃなくて、いろんな大学が、この後だ一っと結んでいきました。気のきいた大学ほど協定をたくさん結んでいると思うんですね。ところが、ほとんど動いていないです、はっきり言いまして。私の知るところ、一番動いているのは、墨田区と早稲田の連携です。多分、これは日本一だと私も自信を持っています。非常に多面的にいろんなことで動いています。

この包括協定という意味をちょっと考えていただきたいんです。包括協定を結ぶことは、実は大学にとってはほとんど何も意味もないです、はっきり言って。まあ何となく地域と連携してますよとって文科省に何か報告したり、世の中に言うのは意味あるのかもしれないんですけれども、ほとんど意味ないです。これ、どこに意味があるかという、実は自治体にとっての意味が非常に大きいということです。それがわかったんですね、やってみると。なぜなら、例えば、墨田区の例でいけば、墨田区の職員が、自分たちがやりたいことがあるんです。じゃ、自分たち、グループをつくって何かやろう、でも、そのままやったらたたきつぶされるんですよ、「そんなのやめろ」って、上から。「おまえたちの仕事じゃないだろう」とたたきつぶされるんです。それを、早稲田の学生だとか先生、私とか、引きずり込むんですね。それで、中で報告するとき、「いや、これは早稲田大学との連携のもとでやっていますから」とか何か言うんですよ。そうすると、「まあしゃあないか」みたいなことで。議会のほうに報告するときも、議員の皆さんも、「一応包括協定あるから、ああ、そのもとでやってるのね」みたいなことで、すっと通るといいます。これは、自治体側にとってはすごくやりやすい制度です。一種のアンブレラです。アンブレラを最初にかけてしまえば、あとは何でもできます、はっきり言って。そういう意味で、包括協定はすごく意味があるということです。

でも、多くの地域でその使い方がわかってないんです。自治体の方が、この包括協定と

いうものの使い方をよくわかってないと、こういうことですね。

持たざる者が競争力を持つ時代です。持てる者がどんどん苦しくなるんです。GMみたいなものです。GM、破綻しました。なぜGMが破綻したか、これは明らかです。過去に非常に大きな成功を持っていたからなんですよね。そうすると、それに引きずられるんですよ。

例えば、新宿区の例。新宿区は、地元で早稲田大学があるという、持てる者だったんです。だから、早稲田との間で提携を結ぼうなんていうことは、これっぽっちも考えなかったんです。でも、墨田区はどういうところかという、東京23区のうちで、唯一高等教育機関がないんですよ。唯一大学がないんです。珍しいですよ。東京23区の中で、大学がない唯一の区なんです。だから、自由に動き回って、二十何校に断られて、最後に早稲田がやりましようと言ったという、こういう感じになっているんですよね。墨田区のほうからいろいろやりたいというアプローチが非常に強いということです。だから、物事が進んでいってくれるんです。墨田区は持たざる者だったから、いろいろとできたんです。

ですから、胸に手を当てて考えたとき、じゃ、奈良県はどうなのかなみたいなことはあると思うんです。実は奈良のことをずっと考えていて、きょうは幾つか私が勝手に考えたことを皆さんにご披露するんですけど、かなり重たいですよ。国宝だとか史跡だとか、何か相当重たいような気がします、まちづくりという観点から見るとね。何か引きずられているなという気がしますね。もっと自由にやれば、もっといろんなことができるのに、国宝、重たいから、何かいいものを持っていても、国宝級のものなんか、あり得ないですからね。ぱんと、こう、はねつけられてしまう。そうすると、まちづくりの核となるものが忘れ去られていくことがあったりするなみたいな。だから、持たざる者が競争力を持つてくる時代ということをちょっと考えてみるということですかね。

ここから、日本の社会が破綻しているという話をします。済みません、ちょっと余分な話をされていて、時間が押している。まあいいか。日本の社会が破綻していると思うんですよ。これ、ちょっとざっと見てください。無視される地域と大学と行政の資源。政権の取り合いに明け暮れる永田町。既成概念と慢性疲労の霞ヶ関。重過失交通事故と無差別殺人。いじめの横行と自殺者3万人。奈良県は、一番自殺者率が低いらしいですよ。これはすごいことです。見逃される隣のうつ病、登庁拒否者の増加。これはもう、あらゆる自治体で今起こっています。うつ病になって、もう役所へ行きたくないみたいな方がどんどん増えて大変です。

これ、原因がどこにあるのかという話なんです。何でこうなるのという話なんです。何でこうなるのと。だから哲学なんですけどね。何でこうなるのというのをちょっと解明してみたということですね。そこで出てくるのが、実は「タコ理論」という話です。怪しいんです、すごく。怪しい理論なんですよ。とりあえず、皆さん、きょうはこの場を共有しているということで、一応講師に合わせていただいて、「タコ理論」をちょっとだけ頭にインプットしていただいて、ちょっとだけ考えてください。もう出た後は、わーっと忘れていただいて結構ですから。ちょっとこの場だけ「タコ理論」を頭にインプットしてください。いいですか。

「タコ理論」というのは、簡単な話です。人間という存在を「タコつぼ」と、その中に入っているタコ。中に入っているタコを「素ダコ」を言います。「タコつぼ」と中のタコということに、2つに分けて考えていくんです、人間を。いいですか。中に入っている「素ダコ」が人間じゃありません。「タコつぼ」と「素ダコ」、ワンセットで人間です。こういうふうに考えてみるということです。そうすると、非常にいろんな物事がわかってくるといって、一種の二元論なんですけれども。これ、「タコつぼ」同士が実はぶつかり合うんです、「タコつぼ」同士が。世の中の競争社会と言われているやつは、何がぶつかっているかという、実は「タコつぼ」同士がぶつかっているんです。「素ダコ」同士がぶつかっているんじゃないんです。これを見きわめないで、実はどんどん苦しくなります。

「タコつぼ」とは何か、右のほうに書いてあります。これは、個人の「タコつぼ」があるのと同じように、組織という「タコつぼ」があります、県庁という「タコつぼ」があります。県庁という「タコつぼ」の中に、組織の「タコつぼ」がいっぱい詰まっていると思ってください。実は、それも階層構造になっていて、何々部という「タコつぼ」もあります、何々課という「タコつぼ」もあります。いろんな「タコつぼ」が重層状態になっていると、こんな感じですよ。組織の「タコつぼ」は、国家であり、役所であり、企業であり、制度であり、法律であり、政策であるというものです。個人的な「タコつぼ」もあります。これは、学歴であったり、役職であったり、肩書きであったり、資格であったり、お金というのは「タコつぼ」です。考え方そのもの、実は、もっと究極的に言うと、言葉そのもの、これも「タコつぼ」です。こういうふうに分けます。

そうすると、「素ダコ」って何なんだという話なんですよね。これは、多分、人間の存在の一番奥底にある本質的なところと。要するに、「タコつぼ」的な、いわゆる自分を規定しているいろんな概念をはぎとった最後に残るもの、それは、多分、幸せを感じる心であっ

たり、悲しむ心であったり、悟りを得る心であったりということになります。それが「素ダコ」だと。とりあえず、そう考えてください。難しく考えると、夜眠れなくなりますので。うちの学生も、かなり眠れなくなった学生がいっぱいいますね。「タコ理論」に侵されちゃって。「タコ理論は、何か人を不幸にしますね」とか言われて、「ごめん」とか何か言って、もう謝っておきましたけどね。いいですか。こういう話なんです。

そうすると、「タコつぼ」の習性というのが見えてくるんですよ。これは、まず自己の「タコつぼ」を正当化します。自分が入っている「タコつぼ」が正しいものであると正当化します。そうじゃないと、人間は生きていけないです。まず、弱い「素ダコ」というのは、「タコつぼ」が必要なんです。だから、「タコつぼ」の中に入ろうとします。人間は、安全を求めるようにして、「タコつぼ」の中に入っていきます。そうですね。それが、肩書きであったり、大企業というものであったりしますね。「タコつぼ」であることを正当化し続け、「タコつぼ」の原因を他者に求めるということです。ほとんど他人に原因を求める。他人になすりつけるという話です。これ、男は何かうまいですけどね。家庭でそれをやっちゃうと女房にしかられますけれどもね。役所で一生懸命他人に責任をなすりつけるように。それをしないと役所の中で生きていけないんですが、それ、そのままのバージョンで家庭に入ると、何か女房から怒られちゃったりして、「あなた、役人だから、また責任を私になすりつけたわね」みたいなことを言われて。そういうふうに言われた経験のある方、手を挙げてください。首長の皆さん、ありませんか。大丈夫ですか。

次、ほかの「タコつぼ」にぶつeketくなるんですよ。自分の「タコつぼ」の存在を確かめるために、ほかの「タコつぼ」にぶつけるんです。例えば、自分が立派な肩書きを持っていたとします。そうすると、「おれはこんな肩書きを持っているんだ」と言って、あまりちゃんとした肩書きを持っていない人にぶつけるんですよ。自分より大きな人にぶつけないよ。自分よりも弱い「タコつぼ」を持っている人に、ばんとぶつけるんですよ。それによって、「見たか」と。「おれは総理だ」って。今、たまたま知事とか言わなかったんですけど。「おれは総理だ」とか何か言って、こういうふうにぶつけるんです。それが「タコつぼ」の習性なんです。自分が課長であったり、係長であったり、いろいろしますね。「おれは社長だ」とか、いろいろありますね。「おまえは新入生だろう」とか、ばんとぶつけるんですよ。その結果、これが最大の問題なんです。自己の「タコつぼ」にとらわれて、他人の「素ダコ」が見えなくなるんですよ。

その結果、どういうことになるかということ、実は、「素ダコ」が傷んできます。ぶつけれ

れたほうの「素ダコ」は傷みますよね、当然。ぼんとはね飛ばされて。「おまえは新入生だろう」、ぼんとか言って。でも、実は、ぶつけたほうも傷んでいるんです。それを実は、ぶつけたほうはわからないんです。これが問題です、社会の。社会全体の問題です。ぶつけたほうの「素ダコ」も傷んでいるというのをぶつけたほうがわからないというのが、これが社会の問題なんですけどもね。ちょっと深い話になってしまって。

これは本ですね。ここまで来たら、そろそろ私ももういいかなという感じがするんです。本を紹介するために来てるわけでありまして。実は、あそこに書いてあります。市町村長の皆さんに1冊ずつご進呈いたしましたので、役所の皆さん、首長の皆さんのを横から奪い取って、読んでいただければそれで結構です。私も、最近何をやっているかよくわからないんです。自分で買って皆さんにばらまいているという。どういうことになっているのか、よくわからないんです。

「タコ理論」、超上級編になります。これは応用問題です。こういういろんな社会的な問題があります。これ、すべて実は「タコ理論」で解明できる、説明ができるんです。特にここでは説明しません。きょうはまちづくりの話をしめますので、まちづくりを中心にちょっと話を進めたいと思います。これから後、「タコ理論」的な分析に入りますから。いいですか。ささっといきますよ。

「タコ理論」、ちょっとわかりにくいかもしれませんが。1つだけ例を出しておきましょう。「篤姫」をごらんになった方。NHK大河ドラマ「篤姫」。ああ、ありがとうございます。篤姫が江戸城を明け渡すに当たって、何かこれで大奥を閉める最後の御台になっちゃったと。で、悩むわけですよ。それで、13代将軍は自分の夫でしたっけ、墓前で悩んでいると出てくるんですよね。それで、こう言うんですよ、「別にいい。大奥なんか、なくなってもいい。おれが守りたいのは、徳川の心なんだ」と、こういうふうに言うんですよ。篤姫が「よかったよかった」といって江戸城開城のほうに向かうんです。これがまさにそうです。要するに、江戸城であったり、徳川体制であったり、大奥というのは「タコつぼ」です、これは。組織的なものですから。システム的なものですからね。その「タコつぼ」ではなくて、一番重要なのは徳川の心なんだと語りかけられて、「ああ、そうなんだ」と気づくという。

大体、ドラマ関係はほとんどこの構造になっています。「タコつぼ」で葛藤をして、「素ダコ」的なものを守るのかどうかと、この構造にすべてなっていますから、皆さん、「タコ理論」でドラマを見ていただければ、すぐわかります。「もうそろそろ「素ダコ」のあれが

出てくるかな」とか。

「タコつぼ」型まちづくり。さっといきますね。箱ができりゃいいと思うんですよ。ところが、箱ができて、ちゃんとまちづくりになったところというのは、そりゃ、幾つか成功したところがありますけれども、どうなんですかみたいな話です。駐車場、道路、アーケード、ショッピングセンター、タワー。墨田区には新東京タワーができるんですけどね、きれいな街並み、統一された建物、街の色。次に、人が集まればいいと思うんですよ。人が集まって、果たしてちゃんとまちづくりできるのかという話です。

あと、みんなが考えていることがばらばらなんです。大体、まちづくりをすると、1人1人が考えている、いわゆる「タコつぼ」的な社会がばらばらなんです。だから、それが統一できない。だから、結局まちづくりというのが1つにならないんです。どういうところに落ちつくかというところ、箱物だ、イベントだということにしか落ちつかないんです。結局何をやっても達成感がないと、こういうことになってしまうんですよ。

まちづくりの3人才の話をして。先ほど言いました。「若者」と「ばか者」と「よそ者」です。いいですか。この3人才が重要なんです。じゃ、ちょっと多数決をとってみたいと思います。いいですか。皆さんは、街の中でこの「若者」と「よそ者」と「ばか者」のどれに分類されますかという話なんです。いいですか。1回だけ手を挙げていただいてよろしいですか。いきますよ。「若者」。ああ、あの近辺、いらっしゃいますね。「若者」。あ、いらっしゃいました。もうね、恥ずかしさも省みず。ああ、気分が若いということ、全然構いません。「若者」。いいですか、次いきますよ。「よそ者」。ねえ。そうですね、「よそ者」。じゃ、最後に「ばか者」。ああ、いいですね。ああ、もう予習をして、いい人ばかりで。そういうことで、ありがとうございました。

そうなんです。まちづくりには、「ばか者」がいないとだめなんです。いいですか。「若者」、います。これは大体ジモティーであったり学生であったりします。「若者」は何をする人か。これは、30年後もこの街に責任を持っている人です。「若者」というのは、そういう存在です。これはジモティーがそういうことですね。ジモティーというのは、地元の人のことですよ。次に、既成の概念にとらわれず、本質を議論できる人です。これが「若者」です。いいですか。「若者」は何を言ってもいいんですよ。青臭い議論ができるのが「若者」なんです。だから、これは学生です。

「よそ者」ってどんな人かというところ、よそから来た人たちですから、どういうことかというところ、ほかの街の様子をよく知っているんですよ。それで、この街のこの人にひかれて、

そこの街にやってきちゃうんですよ。それで、何かそこでいろいろとしちゃうんですよね。そういう人たちが「よそ者」なんです。「ばか者」を支え続ける人です、「よそ者」は。ところが、今までのまちづくりってどうだったかという、この「よそ者」がやってきては地域を食い物にして、食うだけ食って出ていったということなんです。これが今までの日本におけるまちづくりの歴史なんです。地域開発と言われているものの歴史なんですよ。「よそ者」が要するに食うだけ食って出ていくという。そんな「よそ者」は要らんです、はっきり言って。

次、いきましょう。「ばか者」。これは圧倒的にジモティーです。どんな人かという、自分の成功イメージを持っている人です。いいですか。なおかつ、ばかのようにそれに固執し続けて、もう周りからアホと言われてますね。「おまえ、何でそんなことをずっとやり続けてるんだ」みたいな。「何でそんなばかなことを考え続けている」。でも、食らいつき続けるんです。その人が持っている、それが街の成功イメージだと思うから、そこに食らいつき続けるんです。その人がいるかどうかで、実はまちづくりのほとんどすべてが決まります。

私は、実は、国土交通省に出向してたときに何をやったかという、全国のまちづくりの成功事例を引っ張り出してきて、何が成功要因か調べてみました。第1番目に来るのは何かという、明らかに「ばか者」がいるんです。特定の個人です。特定の個人の「ばか者」がいて、その人が引っ張りまわしているんですよ。それで、外から来た人をその人が歓待をして、いろんなところに引きずり回したりしながら、いろんな人につなげたりしながら、わーっと回し続けているというところが、まちづくりは成功します。「ばか者」の姿が見えないところで、まちづくりが成功した事例はないです、残念ながら。湯布院とかを見ていただいても、もう如実にわかります。街の本質をいつまでも見続けられる人です。これが「ばか者」なんですよ。

さて、それで、じゃ、行政の立ち位置をどうするんだという話なんです。行政の職員は、この中の一体どういう立ち位置でやるのか。首長の皆さんはどういう立ち位置なのか、議会の皆さんはどういう立ち位置なのかという問題なんです。この立ち位置のとり方によって、要するに市民との間、市町村民との間の関係が非常に微妙な関係になってきます。これをうまくとればいいんですよ。

さて、次、いきましょうか。まちづくりの3人才を「タコ理論」で切ってみましょう。もう、どんどんいきますよ。いいですか。「若者」、「よそ者」、「ばか者」といいますね。まず、

「タコつぼ」型のまちづくりを考えましょう。「若者」というのは、「タコつぼ」、へたです、はっきり言いまして。「タコつぼ」づくり。いいですか。何の経験もありません。何のスキルも持ってないんですよ。ただ、青臭いことは議論できるんです。何のスキルも持ってないから、これは三角ですね。「よそ者」は、結構いろんなところで活躍しちゃって、いろんな例を見ているから、「よそ者」はいろんなことができるんですよ、「タコつぼ」づくりが。システムをつくったり、金を取ってきたり、いろんなことができます。「ばか者」は、この「タコつぼ」づくりがうまいタイプと下手なタイプがいます。これが要するに「タコつぼ」型の3人才です。

ここでだれを活用すればいいかというのと、「よそ者」を活用すればいいんですね。「よそ者」をうまく連れてきて、うまい「タコつぼ」をつくって、「タコつぼ」型のまちづくりをやればいいんです。別に「タコつぼ」型のまちづくりを否定しているわけではありません。それはそれでいいんです。それで、観光客をいっぱい入れて、お金を落としてもらってということをやればいいんですね。これが1つ。

次、仮に「素ダコ」的なまちづくりを考えるのであれば、これは圧倒的に「若者」です。「若者」が本質的な議論を吹っかけてきます。私も、実は木更津というところをやっている、うちの学生が木更津の「若者」の衆の中に入って、ホームページづくりをしていたんですけども、結局、地元の「若者」の連中があまりやる気ないので、その女の子、学生の女の子、こう言いました、「あんたたち、やる気あるんですか」と。「あんたたちがやる気あるんなら、私はホームページをつくります。やる気がないなら、やめてください」と言って。そうしたら、地元の「若者」連中は怒りましてね。「おまえは、おれたちが苦勞してるのを何も知らないだろう」とか言って、もうけんかになりそうになったんですよ。そういう青臭い議論を学生はできるんです。「あんたたちは、何でまちづくりをやっているんですか。何が幸せなんですか。それで、結局地元の人たちは幸せになるんですか。お金がもうかって、それでいいんですか」と、こう何か非常に青臭い議論を吹っかけてきます。これが重要なんです。次に重要なのは圧倒的に「ばか者」です。「ばか者」がそういう本質的なことをずっと考え続けて、それに食らいつき続けているということですね。これが「素ダコ」的なまちづくりの話です。

次、いきましょう。じゃ、大学を見てみましょう。地域の大学の話ですよ。大学の人材、ここでは一応教員と学生と職員と、この3つを書いておきました。ここに人数を書いております。これ、実は早稲田大学の事例です。専任の教員が2,000人いて、非専任が

4,000人おります。学生は5万7,000人います。職員は大体1,000人ぐらいしかいません。こういう感じです。

この中で、じゃ、「タコつぼ」的な世界を見てみましょう。教員は、自分の研究の世界での「タコつぼ」づくりのプロフェッショナルです。研究のプロフェッショナル。次に学生は人生経験のスーパーアマチュアですから、「タコつぼ」づくりはヘタです。次に、職員。職員は、大学経営という意味でのプロフェッショナルです。だから、「タコつぼ」型のまちづくりをやろうと思ったら、この教員をうまく活用するということですよね。教員の技術であったり、教員の名声であったり、いろいろとやればいいんですね。

仮に「素ダコ」的なまちづくりを考えるのであれば、実は、教員ははっきり言いまして、「タコつぼ」世界に忙しいんですよ。だから、学生1人1人を育てるところは、なかなか力が回らないです。どちらかという、学生です。学生が、この「素ダコ」的な議論のプロフェッショナルです、さっき言ったように。職員は、それをサポートするということです。だから、冒頭申し上げましたように、学生が大学という資源の中で非常に大きな位置づけにあるということです。それがまちづくりの中で発揮されるということをお知らせしました。

実は、大学の中には、もっといろんな資源があります。校友であったり、在学生の家族であったり、大学の連携先、街などなど。大学にはいろんな資源があります。でも、大学から地域に対してこんな協力をやりましょうという持ちかけがあったとしても、それはほぼうまく進まないです。それは、どちらかという、大学の先生が自分の研究のためにやりたいから持ちかけた持ちかけだったりします。それは、地域にとっていいことなのかどうかという、そういう議論ではなしに。だから、どちらかという、地域のほうから大学に対して、「おれたちはこんなことをやりたいんだけど、これをしてくれる教授はいるか」とか、「学生を引きずり込みたいんだけど、どうすればいいか」と、そういう問いかけをやってください。そうすると、大学の中でいろいろ考えます。早稲田大学に持ちかけていただいて結構です。早稲田の中に資源がないかもしれません。いいんです、別に。早稲田に資源がなきゃ、皆さんはさっさと早稲田をけ飛ばして、ほかの大学に行きゃいいんです。早稲田大学としては、全然構いません、それは。

いいですか。別にその提携先の大学に固執する必要はないんです。なぜなら、地域をよくしたいのは皆さんなんですから。大学が地域をよくしたいなんて、基本的には考えてないんです。そこの論理の食い違いをしっかりと頭に入れないと、お互いに不幸なことになり

ます。

さて、教えてください、ちょっと奈良の話をします。あと10分で。奈良の話。奈良って何なのかって、全然よくわかんないんですよ。ずっと考え続けているんですよ。あそこにちょっと書いておきました。奈良人のアイデンティティーってどこにあるんですかという話です。奈良人のアイデンティティー。これは、「ならじん」と読むのか、最近の「おくりびと」にちなんで、「ならびと」と読むのか。どれがいいですかね。「ならじん」、「ならびと」、「ならひと」。「ならと」っていうのがありますけどね。「ならじん」って言わないですね。言わないですか、普通。

【参加者】 「奈良の人」です。

【友成教授】 言わないですね。奈良の人って言うんですよ。奈良の人というと、何か小樽の人みたいな感じで、演歌の題名。そんな感じがしますね。奈良人のアイデンティティーってどこにあるのかと、実はここ1週間、2週間ぐらいずっと考えているんですけども、ようわからんのですよ。いろんな方に聞きました。何となくちょっとわかってきたんですが、いまだによくわからないという。奈良人としての「素ダコ」的誇りって何なんですかというのがわからないんですよ。「おれは奈良の人なんだ。奈良人なんだと。おれはこれが誇りなんだ」と言えるものが何なのか。「阿修羅像だ」。いや、それは誇りかもしれないけれども、どうなのかなみたいな感じがしますよね。

次、いきましょうか。奈良人のDNAのありか。まちづくりはDNAという話をよくします。これは遺伝子ですよ。要するに街に沈み込んでいる一番奥深くにあるもの、街の。それをDNAだという表現をします。奈良人のDNAのありかってどこにあるんですか。これがよくわからないんですよ。済みません、「よそ者」なものですから、よくわからないことだらけで。きょうは皆さんにそれをお聞きしたくて、やってきてるんですけどね。奈良人にとって、遷都とは、国宝とは、観光とは何なのという話です。観光、年間400万人でしたっけ。もっといます？ 4,000万人でしたっけ。何かいっぱい来るんですよ。すごい人数の方が来られるわけです。遷都1300年。国宝、ありますよね。これって、奈良人の皆さんにとって一体何なんですかという話なんです。

ちょっとご参考までに、アインバールハイトという経営哲学者がおりまして、この人が「観光」をこういうふうに表示しています。「観光とは、光を観ることである」。そのものですよ。光を観るで観光なんですけどね。「人生を切り開く光を心で観ることである」と言ってます。この観るという漢字は、どちらかというと、心で見ますね。単に見るんじ

やなくて、心で見るということです。光って何かというと、「1人1人の人生を切り開く光」を「心で観る」ことなんです。その光を観たくて、やってくるところが場所なんです。奈良が、アインバールハイト的な世界で真の観光があるとすると、多くの人たちが自分の人生を切り開く光を求めて奈良にやってきて、それでいやされて、また帰っていくんです。そういう人たちは、どういうことになるかということ、また奈良にやってきます。単に「タコつぼ」の阿修羅像があって、それを見に来て、ついつい抱きついてしまうほどの情念を持っていない人は……。ああ、あれは弥勒菩薩か。弥勒菩薩か何かの指を折っちゃった学生がいましたけどね。情念を持っていない人は、1回見たら終わりです、はっきり言って。また来ようとは思わないです。そういうことなんです。だから、観光の本質とは何かということをしっかり考える必要があるだろうなど、こういうお話ですね。

さて、奈良って何？ ちょっと複雑な図形があります。これはなかなか説明するのが難しいんですけど、ささっといきますね。左のほうを見てください。これ、世の中の構造をあらわしたものです。世の中、およそ、マクロ的な構造からミクロ的な構造に、こういう逆三角形構造になっております。マクロからミクロ。ミクロというのは、自分です。だんだん、こう領域が拡大して行って、奈良県とかなっているんです。これは、日本とかなって、世界とかなって、宇宙とかなりますよね。これがどんどんマクロに、こうやって動いてくると。こういう概念の中で整理をしてみましょう。そうすると、奈良というのは、古代の中央集権国家です。中央集権国家が始まったところですよ。そういうマクロ的な意味を持っています。鎮護国家思想であったり、律令制度であったり、藤原氏と反勢力との権力抗争というのは、これが奈良時代ですよ。奈良時代を象徴するものです。これは、日本という国が中央集権国家としてちゃんと形づくられた、その歴史なんですよ。そんな中で、仏教勢力を入れて、国宝だとか、特別史跡があって、地方豪族が割拠していて、中央から遠い地域はちょっと何だと思っただけでいいな。ところが、ミクロには重税に苦しむ民がいたわけです。さらに、その下にはこの地に生き、逝った1人1人の民がいたんです、ここにね。これがミクロです。これが、奈良という歴史的に見たときに、こういう構造になっているということなんです。

これを考えたときに、いいですか、右を見てください、これ、「素ダコ」です。これ、「タコつぼ」です。ああ、右、ちょっと切れてますけどね。何を書いているかということ、人間が生きているということは、実はこういうベクトルの圧力が常にかかるんです。要するに、人間は「タコつぼ」を求めないと生きていけないんです。だから、「タコつぼ」を求めます、

どんどん。だから、この社会は、「タコつぼ」を求める圧力がどんどん高まるんです。だから、日本は中央集権国家、要するに、国家というものができていく過程というのは、強力な「タコつぼ」を求めるという時代です。これは、大体男です。男は肩書きを求めます。地位と名誉と肩書きを求めるわけです。だから、こういう圧力が働くんですよ。ちょっと見てください、でも、今の時代、どういう圧力がかかっていますか。今の時代、どうも違うんじゃないかと。むしろ、ちょっとこっち側のほうが重要じゃないかと言われ始めているんです。それが何かというと、要するに地方分権であり、現場主義なんです。地方分権、現場主義というのは、こっち側の圧力を高めるんじゃないくて、むしろマクロからミクロのほうの圧力を高める考え方なんです。

そうすると、歴史的に奈良は中央集権という非常に上方圧力の中で歴史が展開されてきたにもかかわらず、今の時代は、こっちになっているということです。そうすると、奈良は一体何を語るんですかという、こういうことなんです。今ちょっと難しい話になっちゃいました。こんな難しい話をするつもりはなかったんで。

だから、何を言いたいかという、こっちのミクロな、この地に生きて亡くなった1人1人の民という視点から、こっち側のマクロなこの現状、要するに古代のありようというのをどういうふうに読み解いていくんですかという話なんですよ。ここのストーリーがないと、おそらく胸に響かないです。こっちだけを語ろうとすると、これ、おまえたち、中央集権の話だろうと。この文脈というのは、日本の国家を形づくって、強力にして、官僚制をがっちりして、豪族がしっかり生き延びて、藤原氏が権力を握って、そのために女帝を活用してみたいな、何かそういう話なんです。その文脈で語るんですかという話なんです。そうじゃなくて、ほんとうに語らなきゃいけないのは、こっちの文脈で歴史を語っていくということが必要じゃないかと、こんな話をしたかったわけです。

「街で拾った、奈良人を解説する」です。奈良人って何ですかって、とある方にお聞きしたんですけれども、いろいろとお聞かせいただきました。「寝倒れ」ってそうですか。済みません、1つ1ついきますが、「寝倒れ」、あるなと思う方、手を挙げてください。はい。

「奈良の寝倒れ」。こんなもんですか。「大仏商法」。はい。ありますか。「見栄っ張り」。「結婚式豪華」、「ピアノがある」みたいな。「ピアノがある」って、よくわかりました。近鉄線に乗って、家がやたら豪華ですね、皆さんね。普通、大阪に行くと、こんな狭いところにばーっと建て込んでいますけれども、奈良の家々、昔の旧家みたいなのは、ものすごい立派だし、新しく建った家も立派ですよ。多分あそこにちゃんとピアノが入っているん

だろうなと思いましたね。「建て倒れ」。何か公共機関が、よせばいいのに、通常のスペック以上のものをつくってしまったりとかね。「それでお金を使ってしまいました」みたいなね。だれですか、今胸に手を当てて。「奈良府民」と言われていますか。千葉県民なんだけど、東京都民みたいなものですね。「自殺者率最低」。こういうのが奈良を代表するキーアイテムなんですね。

実はこれをちょっと解析してみたんです。これ、2つに解析しました。要するにネガティブ思考で考えた場合とポジティブ思考で考えた場合です。これを仮にネガティブ族とポジティブ族と言う。ちょっとおもしろくないですか。部族の違いです。蘇我氏と物部氏じゃないですけども。ネガティブ部族とポジティブ部族、この2つでちょっと考えてみましょう。いいですか。ネガティブ部族的に考えると、実はこれは多分持てる者の悲劇ですね。「寝倒れ」みたいな話だとかね。自分たち、持っているから、別に何もしなくていいんですよ。非常に豊か、基本的に。済みません、何か、私、自分勝手に何かいろんなことを言ってますから、真実だと思わないでくださいよ。「よそ者」が勝手に言ってる話ですから、勝手に傷つかないでくださいね。よろしくお願ひしますね。国宝だとか史跡だとか古代が重いんです。ほんとうに大切なものが軽んじられてしまう。「奈良府民」。歴史の表舞台から遠く、影が薄い。多分そんな感じなんじゃないかなと思ったんですよ。

これをちょっとポジティブに考えてみてください。いいですか。古代中央集権国家がここにできたということは、どういうことか、大和朝廷がこの辺を土台にしてできたということは、どういうことかという、これ、圧倒的に古代から民が豊かなんですよ。豊かだから、大和朝廷がここにできて、中央集権国家をつくらうということができたわけでしょう。貧しいところは、つくれないです、はっきり言って。だから、民の視点からいうと、非常に豊かなんですよ。日本の始まりを生んだんです。皆さんは、日本の始まりそのものをつくった、いわゆる朝廷だとか藤原氏の立場に立つのか、それとも、この地に日本の始まりを生んだ民1人1人の立場に立つのかということなんです。大体、世の中の的に言われているのは、朝廷であり、豪族であり、権力者の立場で物事が語られる文脈です。そうじゃなくて、それを生んだ民の豊かさという文脈で語るのかという、こういう話ですね。中央集権のもとでもたくましく生き抜く民がいたわけですよ。

さっきの「自殺者率」の話もありますね。これは、権力のひざ元でうまく生き抜いてきたわけですよ。この生きるうえでの1つのしたたかさというのが自殺率の低さというものにあらわれているのではないかと、先ほど某課長からお伺いしまして、そのとおりだと

思いました。中央にくみせず、独自の生き方をはぐくんできたに違いないんですよ。いいですか。

「奈良府民」と言われていますね。これ、実はおそらく明治維新のころにいろんな議論がありましたよね。京都から都が移ったときに、大阪と京都と東京は府になったんですよ。大阪府と京都府になったんですよ。それは何かというと、昔、都があったからなんです。でも、その中で奈良も府にせよという議論は、おそらくあんまりなかったでしょう。そんなに主張しなかったんです、奈良は。それだけ影が薄いというふうにとられもするけれども、逆に、「俺たちは別に、そんな、昔都なんていうところで肩ひじ張らなくていいよ」と思った、その豊かさです。それがあったということじゃないかと。「自殺率最低」。「古代の時間が豊かに流れている」んじゃないかと思います。古代から民1人1人が引き継いできた豊かな時間がこの地に流れているんじゃないかと思います。吉野の地域、南部のほうは特にそうじゃないかと思うんですよ。それが人々の心を豊かにし、自殺というところに至らないものになっているのではないかと思うんですよ。これ、ポジティブにとらえると、そういうことになります。だから、私は、こう考えて奈良というものがわかりました、何となく。「ああ、そうか。そうなんだ」と。これは、結構まちづくりをやるとおもしろいことになると、実は思ったんですよ。

さて、じゃ、平城遷都1300年というのを今の図式の中で1回考えてみましょうか。奈良人のDNA探し。平城遷都というのは、平城遷都以前というか、それは何かというと、奈良地域に歴史の光が当たっていた時期なんですよ。奈良時代ですよ。いいですか、皆さん、歴史の教科書の中に、県の名前のついた時代がどこにありますか。奈良時代以外にありますか。あ、どうぞ、どうぞ、出てください。何だったら、マイクをお貸ししますから。私もよく知らないんですけども、歴史はあんまり詳しくないんで。多分、奈良しかないんですよ。奈良時代しかないような気がする。江戸時代はありますけれど、江戸じゃないですよ、もう。東京ですよ。東京時代と言わないです。そうですよね。飛鳥時代。県の名前がついたのは、奈良時代しかないじゃないですか。

鎌倉時代。そう、そうなんです。鎌倉時代があるんです。これは、でも市なんです。市は幾つかあるような気がします。鎌倉時代と奈良時代、両方に共通するのは何か。大仏なんですよ。おもしろいですね。これ、さっきの新幹線の中でそれに気がついて、おもしろいなと思いましたね。すごいおもしろいんですよ。

さて、これが数百年間ありましたよね。大和朝廷が三、四世紀にできて、遷都されるま

で大体五、六百年ぐらいですか、これが要するに平城遷都というものの意味ですよ。多数の国宝と特別史跡があるわけですよ。

さて、こっちへいきましょう。1300年。平城遷都以降というか、この後に長岡京に移るんですが、784年にね。それ以降、奈良地域に歴史の光が当たらなくなったんです。済みません、こんなこと言って怒られそうなんだけど。南北朝時代とか、いろいろありましたけども、とりあえずこう言うっておきましょう。この後、大体1200年ぐらいあるわけですよ。奈良時代、74年間だったんですよ、大体ね。いいですか。これ、1200年間のところに営々と築かれた民の営みがあったんです。この地で生きた人たちの思いがここに集結しているんです。その成果としての文化だとか、一番奥にあるDNAがここにしみついてきているんですよ。でも、こっちの文脈で語られたことがどうもないような気がするんです。よくわからないです、私も「よそ者」なんで、全然知らないんでね。一度こっちの文脈で語って見たらいいんじゃないかと。実は、こっちが重過ぎて、こっちが出てはたたかれるというか、あまりクローズアップされないんじゃないかと直感的に思ったんですよ。こっちが重過ぎるから。でも、まちづくりというのは、こっちでまちづくりをやっても、多分だめだと直感的に思います。まちづくりをやるのであれば、やっぱりこっちだと思っんです。まちづくりのコアのコア。こっちがちゃんとあるのであれば、こっちを使えばいいんです。こちらは手段なんです。これは、使えるんです。すごい重要な資源なんです。これをうまく使うために、こっちをしっかりと掘り起こしておくという気がしたんですけどね。

この後の話は、もう適当に見てください。これ、私の自慢話ですから。何か学生といろいろと遊んでいますみたいな話で。学生、いろいろとやってくれます。おもしろいです。1つだけ言います。「素ダコ」の学生が街に入ったらどうなるか。これは明らかなんです。「素ダコ」の学生が街に入って、中小企業の社長と相対して、中小企業の社長、大喜びです。男じゃなくて、女子大生が来たほうが大喜びですけどね。もう楽しくて仕方なくて。それでまた、今の女子大生がいいことを聞いてくれるんですよ、社長に。「何をやっているときが一番楽しいですか。あなたは、この会社をどんな思いで運営しているんですか。この会社は、将来どうありたいですか。もっと大きくしたいんですか」とか、何かいろいろ聞いてくれるんですよ、根掘り葉掘り。そうすると、もう、中小企業の社長、うれしくなっちゃって。「いや、そうなんだよね」とか言って。日ごろは考えないほんとうに本質的なことを考えて、その学生たちに伝えようとするんですよ。学生たちがやってくると、工

場がきれいになるんですよ。今までほかの人があんまり入らないから、工場はあんまりきれいじゃないんですけれども、どんどん入ってくると、「いや、これはちょっと工場をきれいにしなきゃいけないな」みたいな話になるんですよ。それとか、学生がやってきて、案内するのは、社長じゃなくて、社長が従業員に任せるんですよ、「おまえ、あれ、ちょっと説明してこい」とか言ってね。普通、中小企業の従業員って、どうかというと、自分の与えられた仕事をするだけです。だから、会社全体のことなんかわからないんですよ。ところが、例えば「2週間後に何か早稲田のゼミの学生が来るから、おまえが説明するんだ」と言うと、その人は、一生懸命になって会社のいろんな部署を回って、「うちの会社は一体何をやっているのか。何が問題なんだ。ここの部署は何なんだ。この機械はいくらなんだ」って、めちゃくちゃ勉強するんですよ。めちゃくちゃ勉強して、学生が来たら、「いや、こうなんだ」といって説明するという、ものすごいおもしろい好循環ができるんですね。そんなことがたくさん生まれてくるという、そこがおもしろさなんです。

それで、地域経営ゼミというのをやっているんですけど、6年間の成果として、実はメディアに露出しまくりました。もう百何十回出ています、残念ながら、こちらのほうに届いていないと思いますけれども。もう、おそらく日本で一番メディアに露出するゼミだと言っても構わないと思います。それだけで墨田区の宣伝効果があります。3名が墨田区に就職してしまいました。25の墨田を活性化するプロジェクトが動いて、延べ数百名の墨田区民とコラボを展開して、結局何かというと、150名の墨田大好き早稲田生を量産したということです。この学生が全国、全世界に散らばって、何かあるごとに墨田区というのを引き合いに出すんですよ。何か仕事があれば、ちょっと墨田区のあるその企業と何かやったらいいかもしれないという、これは、大きな財産ですね。多分これが一番大きいんじゃないかと思います。だから、今は花が開かないかもしれませんが、今後、どんどん花開いていく可能性が非常に高いという、そんな話ですね。

こんな資料があって、奈良県の包括協定、ここにあります。墨田区との協定は2008年12月24日と。これも非常にややこしいですね。24日。クリスマスイブの日に結んじゃったものですから、次のクリスマスの朝刊にぱっと出まくったんですけども、ややこしい日に結んでみたいな話なんですけどね。

最後、私が自治体向けに研修をいろいろとやっていますという宣伝です。ですから、何かあったらどんどん声をかけてください。自治体職員向けでも構いません。まちづくりの人でも構いません。もう、いろんな意味で研修をやっていますので、呼んでいただければ、

いつでも飛んできますから。全国各地でいろんなまちづくりも参加しています。

これで終わりました。ありがとうございました。すごい、1時間で終わった。1時間で終わらないんじゃないかと思っていましたけどね。

さて、ここであと20分時間がありまして……。ああ、皆さん、YouMEシート、いいですね。ちゃんと書いてくださいよ。終わった瞬間に、出ていただくときに集めますから。ちゃんと出さないと出れないですからね。大丈夫ですか。

じゃ、ここで質問タイムを設けたいと思いますので。どうぞ、何か言いたいことがあったら言ってくださいね。特に後ろのほうに座っていらっしゃる皆さん、何か自分たちの首長とか知事を前にして質問しづらいなということがあるかもしれませんけれども、全然無視してください。はい、どうぞ。何でもいいです。さあどうぞ。いいですね。これね、最初に質問するのは大変なんですよ。大体日本人というのは、この場の雰囲気を読みますからね。一体どんな質問をしたらいいんだろうと。これは、簡単なんです。質問は、講師が喜ぶ簡単な質問をするのが一番いいですね。難しい質問をして、やり込めてやろうなんて考えちゃいけません。議会じゃないんですよ。議会は、それでいいんです。議会は、自分が難しい質問をして、私がいかに有能であるかということを宣伝して、役人をたたいたら票になりますからね。地方の議会じゃないです、今は国会の話ですよ。県議会とか市町村議会の話じゃないですよ。いいですよ、どうぞどうぞ。もう何でも質問してください。

【荒井知事】 「市長いやし研修」というのは、中身、何ですか。

【友成教授】 いいところを突いていただきましたね。市長いやし研修ってやってたんですよ。実は、私の大学院のキャンパスが埼玉県の本庄というところがありまして、大学の名前が唯一ついた新幹線の駅というのがあるんですね。本庄早稲田という駅があるんです、そこに大学院がありまして。この市長が、実は早稲田の出身者なんですけれども。実は本庄との間でも包括協定を結んでいて、いろいろやっているんですが。月に1回、市長と昼飯会をやっていました。向こうの幹部が出て、こっちも大学の連中が行って、とにかくもう何か市役所とか行政とかを離れて、わいわいがやがややろうということで、市長も何かそこではかみしもを脱いで、自分の言いたいことを言う。ただし、ここで言ったことは絶対外につながらないという、そういう前提でやっていたんですよ。だから、自由に市長が自分の思ったことをわっと言ったり、それを聞いてた幹部の皆さんが、またそれに応答したりという。そこを一步出ると、市長は、「おれは市長だ」と言って、一種武装をし

なきやいけないんです、「タコつぼ」でね。何せ、攻撃されますから。敵がいっぱい周りにいますからね。そうじゃない空間をつくってあげたということなんです。これは非常に有意義だったです、我々にとっても。済みません、そんなことをして遊んでいました。単にこれは全部遊んでいた話なんですけどね。知事、どうもありがとうございました、ほんとうに。

知事に口火を切っていただきましたから、あとは無礼講です。もう知事の乾杯の後は無礼講ですからね。はい、どうぞどうぞ。もう何でもいいですから聞いてください。特にくだらない質問……。ああ、ありがとうございます。はい、どうぞ。

【参加者】 先ほど先生と8階から外を見て話しとったときに、畝傍山を見て、大きな古墳という発想をされたんですけれども、奈良に持たれている印象というのは、どういうところにあるんですか。

【友成教授】 ありがとうございます。奈良に持っていた印象って何なのかというのは実は説き起こすのにやたら時間がかかったんです。だから、これを一生懸命つくったんですけどね、結局。だから、私の中での奈良の印象というのは、残念ながら、あまり印象は薄かったんですけどね。大体だれかに聞くと、奈良って大仏しか出てこないんですよ、はっきり言って。ちょっと気のきいた人が阿修羅像と言うぐらいものでありましてね。そうすると、そういう非常に「タコつぼ」的な国宝だとか史跡だとか飛鳥古墳だとかいうのは出てくるんですけれども、でも、その奥に隠れた1人1人の民のつくってきた文化だとか、例えば京都だと、町屋の文化があったり、京都の食であったり、何かいろいろあるじゃないですか。それがにじみ出てくるじゃないですか。人々は、それをめがけて行って、その情緒を楽しむとということをするんですけれども。奈良だと、どうしても東大寺だとか興福寺だとか法隆寺だとか、あれが重過ぎて、奈良というのはそうなんだと。その奥に息づいている人々の息づかいだとか、1200年にわたって積み重ねられてきた人々の生きざまだとか、何かこう、町民の文化であったりしたものというのがストレートに見えてこないんですよ。そこのもどかしさというのがあるなど。

だから、たまたま今回呼んでいただいたのをきっかけに、これは奈良を勉強しなきゃいけないと思って、実は、私は書店に走って、大学受験の参考書を何冊か買い込んで、これが一番わかりやすいんですね。それで、古代の日本の歴史はどうだったかというのを勉強し、DNAを知っていそうな何人かの皆さんに聞いて、奈良ってどうなんだろうという、済みません、その研究発表会みたいなものなんです、きょうは。ありがとうございます、

すばらしい質問。

はい、ほかに何かありましたらどうぞ。何でもいいですから聞いてください。これ、大体学生との間もそうなんですけどね、質問が出るまでずっと私はにらめっこするというのが得意なんです。で、絶対当てないんです。学生には絶対当てません、私は。きょうは当ててもいいんですけれども、何か首長を当てるわけにもいかないしみたい。ああ、もうほんとう、何かつぶやいてください、何でも。はいはい。走りますか。ああ、済みません、ありがとうございます。

【参加者】 それでは、質問させていただきます。

最近よく思うんですけれども、首長さんであったり議会人であったりとかというのは、大体市役所の職員とかというの、基本的には大半が地元の方というのが結構多いんですね。例えば、観光でどこどこへ行くというのは、地元というのは、観光とは言わないですね、自分の地元のいいところ、あると思うんですけれども、それでもよそに行く。言いたいことは、地元のいいところというのは、えてして、なかなか見つけにくいとか、発見しづらい、どうしても意識的に探そうとする部分があるんですけれども、やっぱり自分たちは自分たちの街をよくしていこうというのが基本ですから、客観的に自分たちの街を見れる、その発想の訓練というんですか、そういうのがありましたらご答弁いただきたい。

【友成教授】 ありがとうございます。これは、基本的にやはり地元だけじゃ無理です。もう、いろんなところのまちづくりに頭を突っ込んでいるんですけれども、無理ですよ、はっきり言いまして。テレビ東京が放送している「ガイアの夜明け」というのは、こちらでは放送してます？ その中で、実は信用金庫がまちづくりをやっているという回がありました……。大丈夫ですね、放送事故じゃありませんので。私がかかわっている墨田区に東京信用金庫というのがあります、そこが、とある商店街、キラキラ橋商店街と言うんですけれども、これを活性化するためにプロジェクトを組んでいて、実は私もそこにかかわっていたので、番組にちょこっとだけ出演しているんですけれどもね。実は、ずっと長い間、信用金庫と一緒にあって、その商店街をどうしようかということをおそらく4年ぐらいずっと続けてやっているんですよ。実は、商店街に最初に乗りでいってわかったのは、10年前と全く同じ議論をしているんです。危機感はあるんですよ。何とかしなきゃいけないと思っているんですけども、実は議論がぐるぐる回るんです。それで解散しますよね。また1カ月後か2カ月後、集まりますよね。また集まったときに、全く同じ

議論をしているんです。そういうことになってしまうんです、残念ながら、地元の方だけでやっていると。だからこそ、実は「よそ者」であったり「若者」が必要なんです。「よそ者」、「若者」がやってきて、「いや、これ、おもしろかったですよ」とか言うと、「えー」とかいう話になるんですよね。そこで、自分たちで考えてぐるぐる回っているものをほかの考え方で考え始めるという。

だから、まさに信用金庫を使うというの、実はそういう話なんです。信用金庫というのは、実は地元がなきゃ、生きていけませんから、うまく信用金庫を使うと、まちづくりに非常に有効だと考えたので、実はそのモデルをつくろうと思って、数年間続けているんですけれども。

だから、とにかく「よそ者」をうまく引きずり込んできて、そこに何か一種の乱れを生じさせて、何か考えていくと。だから、「よそ者」に「ここの街でおもしろいところを探してくれ」と言ってやるとか。例えば、こんなことをやりました。東京23区の職員の研修というのがあったんです。これは街の研修なんですけれども、「わかった、墨田区にみんな行こう」と言って、墨田区に引きずり出して、きょうの地域はここだといって街を特定して、ここにグループで行けということをやったんです。ただし、各チームにデジカメ1台だけ持って行っていいと。だから、写真を撮ってきてくれと。「行って、帰ってきたら、それを発表してくれ」と言ったんです。こっちで見ていた側は、実は街の連中なんです。街の連中をば一っとそろえて、実はうるさい連中ばかりなんですけど、街の連中には、「きょうあなた方は、この人たちに自分たちの街のことは一切話をするな。とにかく、写真を撮ってきているから、それを発表するから、それに反応してくれ」という話をしたんです。そうしたら、おもしろいですよ、やっぱり行政の職員というのは、見る目が全然違うんです。ものすごくおもしろいところをえぐり出してくるんです。写真で。こっちは街の連中、「いや、こんなおもしろい話は初めて聞いた」という話だったんです。今まで自分たちには見えなかった世界が、「よそ者」の全く違う職業の人が見て、写真に撮ってきて、提示されたときに、「そうか。これ、おもしろいんだ」とわかってくるということなんです。

だから、奈良で、じゃ、実際にどうやって展開するかという話になると思うんですけども、これはもうやる気1つです。資源はいろいろあります。早稲田を引きつけていただいても構いませんし、奈良県の中にいろんな大学もあるでしょうし、専門学校もあるでしょうし。うまく仕組みれば、いろんな楽しい話ができるということです。もし、そういうこ

とで何か知恵が必要であれば、私の少ない知恵でよければ、幾らでも一緒に考えさせていただければと思うんです。そんなことでよろしいですか。ありがとうございます。すばらしい、何かもうサクラのような質問だったですね、今ね。

はい、どうぞ。ほかに。ああ、どうぞどうぞ。課長、どうぞ。

【長岡市町村振興課長】 先ほどまちづくりの3人オの話があったんですけれども、ここで総括的に行政の立ち位置はというのでクエスチョンが出て、このコメント、おそらくそれぞれの立場によってコメントが違うんだと思うんですけれども。先生が考えておられるこのそれぞれの「若者」、「よそ者」、「ばか者」に対する行政の立ち位置というのは、先生はどのように考えておられるんですか。

【友成教授】 一番痛いところを突いてきましたね。実は、この答えをまだ出してはおりませんで。聞かれると困るなと思ってたら、やっぱり鋭く突いてきましたね。さすがですね。課長、すごいですね、やっぱり。

行政の立ち位置は、実は、これ、答えがありません。答え、ないんです。これは、各行政がどういう立ち位置に立っていくかということを考えるということです。唯一いえるのは、やっぱり行政の職員がここにはならないんだろうなと思います。行政の職員が「ばか者」にはなってもいいんですけれども、まちづくりの「ばか者」になってしまうと、実は、その人は非常に苦しくなります。だから、行政の職員は、この「ばか者」を支える「ばか者」になるということです。「ばか者」を支える「ばか者」になれるかどうかです。だから、行政の職員が前面に出て、まちづくりをが一つと動かしていくと、これはその人がどんどん苦しくなります、やめたほうがいいです。そうじゃなくて、街の中にこの「ばか者」を探してくるということです。「ばか者」を探し、育て、その人を支援し続けるということです。それが、多分行政の立ち位置です。あと、行政は、この人たちだとかこの人たちを連れてこれます。この人たちをうまく連れてきて、実はこの人を支え続けるんです。この人を支え続けるときに、この人たちを使うんです、実は。こういう仕組みなんですね。それができる行政の職員の「ばか者」がいればいいです。そんな感じですね。

この前も、何かNHKの「プロフェッショナル 仕事の流儀」で木村さんが出てましたけれどもね。あの人も、どちらかというと、超「ばか者」です。自分でまちづくりをやっているわけじゃないです。「ばか者」を支え続ける行政の「ばか者」を育てているんですよ、あの人はね。そういう図式になっているんですよ。

だから、これは、行政職員としては非常に醍醐味だと思います。自分でまちづくりをや

ってもいいんですけども、そうじゃなくて、街の中に、「ばか者」になりそうな人、「ばか者」予備軍を見つけ出し、その人を育て、もう徹底的に鍛え上げというか、その人を「ばか者」に仕立て上げて。その人がへこたれそうになったときに「おまえは「ばか者」だ」とか何とか言って、常に何かこう、エネルギーを与え続け、その人のもとにいろんな市町村民がまた集まってきて、いろんな動きが出てくると。動きができていったときに、行政の職員が、「実はこんな制度があるんだよ」とか言って、「ああ、こんな国交省の制度があるから、使ってみないか」とか何とかいう話を持っていったときに、「ああ、これ、使えるじゃないか」とか何かいう話になったときに、「じゃ、ちょっと申請についてはおれが調べてみるから」みたいな話で、うまく外の制度を利用してあげて、そこに兵站を補給するわけですよ。エネルギーとね。もしもそういう制度がないのなら、仮に、首長に働きかけて、「町長、ちょっと済みません、知事に言って、市町村を元気づけるためのこんな予算を県のほうでつくってくれないか。1件当たり50万でいいんだけど」みたいなことを首長に働きかけて、知事に働きかけて、県につくってもらって、それをすとおろして行って、「ばか者」を育てるために使うとか、実はいろんなことができるんです。

大もとは何かというと、そういう職員、要するに「ばか者」を支援する「ばか者」の職員をちゃんと議会だとか首長が温かく見守れるかという問題なんです。行政の職員が使われていないという話をしました。なぜかという、これは職務規程とか何かいろいろあって、何々課の何々係の職員は、これしかやっちゃいけないということになっていて、もしもそれ以外のことをやったら、「おまえは職務規程違反だ」とか、ばかなお話になっているんですよ。そんなことないだろうと。市町村の役場の職員が一番大きな仕事は何か、街をつくることじゃないですか。何やってもいいでしょう的なバッファーのところをうまくつくってあげると、そこで水を得た魚のように動き出すんじゃないかと思うんです。それを、おまえは徴税の仕事をしているんだから、まちづくりの会合に出るなんていうのはけしからんとかいう話になっちゃうんですよ。そうすると、まちづくりもへったくれもないです、はっきり言って。もう、その人のやる気がなくなります。何かそんな感じですかね。どうもありがとうございました。これもなかなか。仕組みのような質問だったですね。

さあ、そろそろ時間が……。もう最後に、じゃ、1問だけ。もうとにかく今これを質問しておかないときょうは眠れないとかいう……。ああ、どうぞどうぞ。いらっしゃいましたね、そういう方ね。いらっしゃるんですよ。

【参加者】 産学官連携が成功したためしがないと言ってたんですけども、その要因

は何なのか。それと、皮肉なんですけれど、首長さんがいて、行政の職員さんがいるでしょう。いわゆる官ですよ。官の人を前に、大学と連携をした地域づくり、大学って学ですよ。連携したというのは、大学と地域が連携するということは、産と学が連携した地域づくりをなさいとことやったら、へ理屈みたいになるんですけれども、講演のタイトルと産学官連携がうまいこといきませんよというふうなこと、整合性がどこにあるのかなど。

【友成教授】 鋭い。

【参加者】 ありがとうございます。

【友成教授】 済みません、鋭いご質問、ありがとうございました。ちょっと言い方が間違っていたかもしれません。産学官連携というのは、既存のパラダイムの産学官連携と考えてください。世の中一般で考えられている産学官連携です。これはうまく進んでいません。それは何かというと、産学官連携の大もとがこっち側になっているということです。大学をこっちを使おうと思うんです。特にここを使おうと思っているんですよ、大学の。この教員が持っている成果を使って、うまく商品開発をやったり新しい何らかを生み出したりしようと思うんですよ。ところが、それ、すごい難しいんですよ。なぜなら、これはもう当然の話なんですけれど、このおじさんがものすごくすごいものを持っているとするじゃないですか。もうどこかの企業に囲い込まれているんですよ。それを新たに、このおじさんを引きずり出してきて、新しい世界を築いていって、何か「タコつぼ」的なものをつくろうというのは、すごい難しいです。逆に、いろんな問題が起こってくるんですよ、私も実際に体験しましたけれども。先生が入って、技術開発をやります。そこに地元企業も入りました。ここで、実はお金の問題が絡んでくるんです。実は、お金をもらった人が持ち逃げしましたとかいって。何かあまり言えないですけどね。いろんな問題が起こってくるんですよ。だから、これ、ほんとうに難しいんです。

仮に、これを使ってうまく成功したとしましょう。でも、その成功って何ですか。その先生にとってみれば、自分の技術が売れました。自分が有名になりました。提携した中小企業は、新しい商品ができて売れました。よかったねと。どっだけ売れるんですか、それ。それは、地域にとって一体何の意味があるんですかという話なんですよ。そんなもんが、ぼこぼこ次から次に出てくりゃ、それは意味あるかもしれないですけども、地域全体にとって、ある先生の技術を使って、ある企業と一緒にやって、何か商品が生まれて、それが売れたですって、何の意味があるんですか。いや、意味はなくてもいいんですけども、そ

これは、地域全体にとってのインパクトから比べたら、非常に小さなものなんです。関わった人も少ない。出てきた成果も、金銭的なもの。もっと違う形があるんじゃないかという話なんですよ。

そのときに、資源として学生を使うというのは、技術的な分野ではなくて、どちらかというと文系的な分野ですね。理系じゃなくて、文系的な分野でいろいろ協力をしていくと。人間の本質的なところに関わるような協力をすることによって、いろんな人がそこに関わって成長する。いろんな人がかかわって、ハッピーになる。それが地域全体の力になっていく。地域全体の力が高まれば、実は、その後の世界として何かが生まれてくるということなんです。実は、そこをねらっているんですけどね。だから、大学と地域との連携、早稲田と奈良との連携、それは、直近で成果が出るものはあります。これは、うち大学院の紙屋教授がやっているような電動バスみたいな話というのは、それは直近で成果が出てきます。それはいいですよ。それはもう、どんどんやればいいんです。

でも、もっと地殻変動的に何かが起こっていく。関わった人たちがみんな元気になる。関わった学生もうれしい。何か元気になってきたなと思うものをどうやってつくっていくかと。1300年とは言わないですけども、おそらく何年か後にそれが花開いてきて、いろんな流れができていくみたいなことというのを目指すということもあるんじゃないかと。それがすべてとは言いません。「タコつぼ」も必要です。お金が回らないと、やっぱり地域は豊かにならないですからね。お金が回りながら、「素ダコ」的なものをちゃんと軸にしっかり見ていくということですかね。

済みません、何か答えになってないですけども。ありがとうございます、素晴らしい質問を。ということで、ありがとうございます。もう終われということでありますけれども、Y o u M Eシートを回収させていただきますので、出口で受け取るようになっています。とにかく、一言でいいですから、何でもいいですから、ちょこっと書いていただいて、私に返していただくとありがたいのであります。

はい、じゃ、これで終わります。ありがとうございます。(拍手)

【司会】 友成先生、非常に有益なお話、ありがとうございます。

まちづくりのさまざまなヒントが、そのお話の中にあっただのかなというように思います。

—— 了 ——